播磨古道を歴史散歩

東西に山陽道、室津道、南北に美作道・因幡街道、巡礼道…。
地方で東西南北にこれほど多くの
主要街道が走っていたところは全国でも例を見ません。
道はヒト、モノ、カネを運び、
各地にさまざまな物語や史跡を残しました。
さあ、古道をテーマに歴史散歩を楽しんでみましょう。

近代化・富国への道
【但馬道】（生野道・馬車道）

市川沿いに神前郡（福崎町、市川町、神河町）を抜けて、但馬国へ向かう道を、古くから但馬道（生野道）と呼んでいました。明治時代になると、生野銀山が国営化され、より効率的な銀の産出が求められるようになり、「生野鉱山寮馬車道」（通称：銀の馬車道）が整備されました。馬車道は“日本初の高速産業道路”として日本の近代化を支えました。

ご利益を求めて歩く道
【巡礼道】

平安時代末期、観世音菩薩が33の姿かたちで民衆を救うという教えにちなみ、33カ所の霊場が札所として定められました。ご利益を求めて札所を巡る経路を巡礼道といいます。姫路市内には第27番札所である書写山円教寺があり、加西市の一乗寺から円教寺を経由して京都の成相寺へとつながっています。

山陰各地と播磨を結ぶ道
【美作道・因幡街道】

美作道は播磨国と美作国を結ぶ道で、姫路市内においては下手野を分岐点としてたつの市に抜ける山陽道の支路に当たります。古くから美作・播磨の鉄を畿内に運ぶ重要な道でした。現在の佐用町でさらに分岐して鳥取に向かう因幡街道や美作を経て鳥取、島根に向かう伯耆（ほうき）道や出雲道ともつながっていました。

庶民も歩いた物見遊山の道
【山陽道】

もともとは近畿と北九州を結ぶ官道として整備された律令国家最大の幹線道。江戸時代になると西国街道と呼ばれるようになり、参勤交代の大名行列や行商人などが盛んに行き来する五街道に次ぐ重要な街道でした。江戸時代中期になると、伊勢参宮をはじめとする寺社参詣や名所旧跡を訪ねる物見遊山的な旅も庶民の間で広く行われるようになりました。

西国大名の上陸地・室津への道
【室津道】

室津は奈良時代の僧・行基が開いたといわれる摂播五泊の一つです。古くから港町として栄えましたが、江戸時代に参勤交代が制度化されると、多くの西国大名が船旅の起終点を室津としたため、その繁栄は最盛期を迎えました。姫路藩の飛び地であった室津と姫路を結んだのが室津道です。

【浜街道】

室津道からそのまま海側を走り、高砂に向かう道です。小赤壁などの名所があり、多くの旅人が訪れました。